

新入園児の取扱方(二)

(二)

東洋幼稚園 岸 邊 福 雄

新入園児を取り扱ふ前に、まづ、その伴れて來た母親を試験することが大切であります。母親に、子供の事を、いろ／＼聞いて見るのです。そして、その答によつて、大抵、その子供の性質を知り、その育て方を觀察するのです。子供が、家庭で、男性的に育てられて居るか、女性的に育てられて居るかといふ事を見わけるのが先決問題であります。それは、母親と、話して居る中に、自然にわかります。一番困るのは、はにかむ、泣き虫の子です。やんちゃ、亂暴は、容易に、共同生活に入る事が出来るけれど、はにかみの泣き虫には、最も困らせられるのです。それで、そのはにかみの泣き虫の

取り扱ひが、やがて、新らしく入園する子供の取り扱ひと云うてもよい位です。

次に、勝ち氣の子か、負けざらひの子かを觀察しなければなりません。勝ち氣と、負けざらひとは、違ひがあります。勝ち氣の子は、凡べて、積極的で、負けざらひは、消極的であります。勝ち氣の方は、しやすいが、負けざらひはむづかしいのです。神經質で、毛ざらひをする、神經過敏で、感じも早いから、先きを見通して、物を恐れる、なか／＼困難です。

母親に、かういふ事を聞くのです。「御飯は、澤山あがりますか」「大變たいきます」といふ母親もあり、「大抵、三つ位」と數を云ふ人もあります。

「御飯は、ならしてあがりますか。むらがありますか。」「神經質と、見當をつけて居る子供の母親は「むらがあります」といふ。そんなのは、「肉や、魚類は」と聞くと、「あまり、好みません。」「それでも、お着の中の、おさしみのやうなものは、お

好きでせう。「はい」「おまんぢうのやうなものは、あまりお好みにならないでせう。」「はい、果物の方を好みます。」

話して居る中に、その母親が、どれほど、注意ぶかいが、どれほど熱心か、また、どれだけ、わけがわかつて居るか、どうかを見る事が出来ます。だんく、話がすゝむ中に、母親は、子供のわるい方面を、一々かぞへたてます。行儀がわるくて困る。あばれる、亂暴をする、おもちゃをこわす。と、さんぐの棚おろしがはじまります。黙つて聞いて居ると、次に、その反對に、子供のよい方面を告げるのです。「お菓子をもらつて來たら、姉にもわけてやります。」「衣服も、あまり、よこしません」ととりとめもない處まで、はめたてます。實子か、さうでないかは、こんな間にも、観はれます。むやみに、わるく云うて、むやみに、褒めるのは、大抵、實子で、よい加減なのは、義理の間でなければ、相當の考のある人です。かく

して、凡そ、子供の性質、境遇を観察します、そして、いよく、入園児の取り扱ひといふ事になるのです。

まづ、子供のお辨當の喰べ方を見ます。開らく時に、そのお辨當は、母親が、手を入れたものらしいか、女中まかせのものらしいか、注意して見るのです。次に、子供の喰べ方を見ます。上手に、喰べるのもあれば、だらしなく喰べるものもあります。こぼす、こぼしたのを、どうするか、見て居る、相當に、家庭で、注意してある子供は、それをひらふ。中には、澤山こぼしておいて、「拾つて御覽なさい」と云ふと、わい／＼泣き出すものもあります。次に、ぶらんこに乗つた様子を見ます。始に乗るのは、こしかけぶらんこです。女性的の子供は、大に恐れる、男性的のは、さつさとおもしろさうに滑ぎます。それから、友達を定めてやります。一週間きめてやります。古參のやさしい、世話をしてくれさう

な子供をたのみます。新入の子供とは、組が違ふけれども、違ふなりに遊んでやつて、その子供が座ることを教へ、お辭儀の仕方をお教へてやりますそんなにして居る中に、だん／＼幼稚園の生活に慣れて来て、古參の子供の手をはなれて、相當の友を、自ら撰ぶやうになります。はにかむといふ事は、なかく／＼なほりませぬ。年と共に、其度が進むやうです。伶俐になるといよ／＼はにかむ。これは、容易になほりませぬから、その儘にしておきます。泣き虫も、そのまゝにしておきます。私の園では、毎月入園をゆるします。それから、最も他の幼稚園とかはつて居りますのは、最初の組は、先生の命令を聞かなくてもよいと、きめてある事です。(これは、多年の経験に鑑みて、よほど、思ひきつて、定めた規則です。)その上の組が半分開く、その上のは、命令の全部を聞くといふ事になつて居るのです。始めの組は、折紙はいやか、「いや」「諾」といふ風に、我儘が通る。その代

りに、その組は、赤ちやんの組です。赤ちやんは子供に取つて、不名譽の至りである。それで、赤ちやんの組に居たくないものは、次ぎの小兄さんの組になる、そこで、命令の半分をきかねばならぬ。小兄さんでも満足の出来ぬものは、大兄さんの、命令の全部にしたがふ組には入るのです。かういふ風になると、子供に、無理がありません。附添ひ人を、どうするかといふ事は、大分重きをおかれて居るやうですが、これは、大した事ではないと思ひます。道の都合などによつて、随分不便なのがありますから、子供について来て、つれてかへるだけならば、差支ないと思ひます、無論、始終、そばについて居ては、子供に依頼心を起させて、保育上よくありませんが。私の園で、有名になつて居る話があるので。それは、數年以前のこと、五歳になる男兒の、強情づ張りの、甘えつ子が、或る幼稚園には入つたのです。ところが、その保母が、いきなり、お辭

儀をせよと命じました。その子は、お辭儀が大き
らひ、いくらせよといはれても、しません、遂に、
お辭儀をしなくてはいけませんと叱られて、わい
／＼泣き出しました。わい／＼泣きながら、母親
に負ぶさつて、遊戯室には入りませんでした。そこで、
先生に、また叱られた。「こゝは、わい／＼泣きな
がら、は入る所ではありません。」と今度は、外に出
て遊びました。なか／＼のいたづらつ子で、庭の
山の上を、ころ／＼ころがった。おもしろいから
お仲間が出来る。皆の衣服がよごれる。先生は、
三度、禁止の命令を發せられた。その子供は、ど
うしても、その幼稚園がいやになりました。母親
は、大層心配せられて、ある日、宅へ来てかく
／＼の次第で困つて居るから、どうぞあなたの幼
稚園へ入れてもらひたいと、頼まれました。私も、
困つたと思つたけれど、まあ、連れて来て御覽な
さいと答へました。それで、翌日、子供は、両親
につれられて来ました。門の處まで来て、僕の幼

稚園は、こんなけちなのではない」といひ出した。
ところが、私の園には、馬車があります。子供を
乗せてあるのです。それを見つけて、やつと、
足が進んで、は入つて来ました。そして、三日も、
四日も、お辭儀をしない。お辨當も、大勢一所に
は、喰べない。別の室で、ひとりつきりで喰べる。
科目になつて居る相撲も、一月位取らない。私と
だけならば取る、それも、大勢の前ではとらない。
そこで、私は、皆が歸つてしまつてから、三十分
位づゝ、特にのこつて、其子と相撲をとりました。
こんなにしてとる相撲に、私は、いつも負けなけ
ればなりませんでした。こんなにして、だん／＼、
その子と、仲よしになつて、その子も喜んで、園
に来るやうになりました。ところが、或る日、そ
の子供が、馬車に乗つて居りました。恰度、馬車
をしまふ時刻でしたから、あぶないから、お降り
なさいと云ひました。どうしても降りませぬ、仕
方がないから、抱きおろしました。すると、子供

は、大音聲で、泣き出しました。私は、叱らうか、どうしようかと考へましたが、「危いからお降りなさいといつても聞かないから、おろしたのに、なぜ泣くのです」と厳しく叱りました。こゝに於て、私の信用は、地に墜ちまして、二三日は、園にも来ませんでした。母親が、「なぜ、あの時、泣いたのか」と聞きますと、子供は、「先生は、あふな」と云はれたけれど、私は、しつかり、つかまつて居れば、決して、あふなくないと思うたから、おりなかつたのに、無理におろしたから、泣いたのだ」と云つたさうです。私は、これを聞いて、實にわるかつたと思ひました。子供は、それ相應に、ちやんと、道理をもつて居るのに、絶対に、命令に服従させやうとしたのは、如何にもわるかつたと思ひました。私は、大分、骨を折つて、仲直りをしました。その後、おひく進んで、遂に、すなはな子になつて、去年卒業しました。卒業の時は、大勢の中で、歌をうたつたり、芝居までし

ました。こんな子供でも、個性をよく研究して、適當な保育をすれば、蛇度、その効果は見られるものです。要するに、よく、個性を観察して、一人づつを扱ふやうな心もちで、大勢の子供を扱ふ事が肝要です。綿密に考へるならば、どんな子供でも、それ相應の取扱ひ方を考へ出すのは、あまりむづかしい事ではありますまい。(談話)

(二)

日本橋常盤小學校
附屬幼稚園 橋本 はな

私の園では、入園の當日、校長から、その父兄に、一通り、子供についての注意をお話せられます。新入園兒と申しました處で、極、小さいのもあれば、學齡近いのも御座いますので、(これまでは、一つにして居りましたが)昨年あたりから、來年度の學齡兒と、その外のとほ、別にして居ります。東西もわからぬ子供が、始めて、母親の膝下をはなれて、知らない處へ來るのですから、そ

の信用を得て、なつかれるやうになるまでには、なかく骨が折れます。子供の性質を見て、いろ／＼に取り扱ふて居ります。

附添人は、あんまり、泣きますの、外は、始めでも、室内に入れぬやうにして居ります。附添人がついて居ても泣くのは、庭か、廊下で遊ばせませす。はじめは、上の組の歌を聞かせたり、お辭儀の一つもさせて、名簿をよんで、返事をさせませす位で直に、外へ出して遊ばせませす。おひ／＼慣れてまわりましてから、積木だの、折紙のやうなものをさせませす。これも、さうしなくてはならぬといふのでなく、随意にさせるのです。

玩具も、機械的のものでなく、なるべく、子供が、手で動かす事の出来るやうなのを、氣をつけて、撰んで居ります。雨天には、幼年書報を見せたり致します。凡べて、命令的でなく、自由にさせませすのです。暖かくなりますと、砂場に出て遊ぶ事もあります。遊ぶ間は随意にしておきます。

それから、衣服は、なるべく、運動をよくさせる爲めに、よごれてもよいのを着せてもらふやうに父兄にたのんで居ります。紙と、手拭きは、必ず、もたせるやうに致して居ります。

附添人は、待つて居ります間、必ず空手で居てはならぬと云ふ事になつて居りますので、皆その控室で。裁縫なり、編物なりいたして居ります。凡べて、恩物の取り扱ひなども、自由に、自分といふ事を主と致しまして、決して、強ひませんのです。石盤と、石筆と、石盤ふきとは、始終もたせておきます。四角や、三角の物の形を畫いて、喜んで居ります。玩具も、あれが出してもらひたいと云へば、どれでも出してやる事に致して居ります。(談話)

(二)

神戸幼稚園 佐藤 滿壽

○入園前に於ける體格検査 三月中旬それ／＼



入園申込者へ通知致しまして體格検査を行ひます
 として其結果心臓病腦病トラホーム其他傳染病等
 の如き者には入園を拒絶する事に致して居ます此
 検査は五六年前から實行致して居ますが腦病の子
 供をとらない事に致しましてからかきむしつたり
 たゞきあつたりする事が殆んどないといふ位にな
 りました此體格検査の結果として愛兒に思ひもよ
 らぬ病ある事を發見されて喜び治療を受けて健康
 に復するもの年々殆んど志願者の一割に達します
 殊にトラホーム心臓病には父母の知らで過すもの
 頗る多きものでありますから餘程有効であると信
 じます其他幼兒の附紐のかたきこと摩着をさする
 事牙齒の不潔耳つまり等の不注意をしらす事が
 多々御座います

○入園期 右の様に致しまして體格検査に合格いた
 しました者を三部に分ちまして一部は四月一日に
 一部は六日に今一部は十一日にと三度に分けて入
 れる事に致して居ます尤もこちらでは百五十名定

員で御座いまして半数以上は學齡兒で御座います
 から毎年五月には八九十名も入園致しますので御座い
 ます

○最初の仕事 入園致しますと先づ最初には自分
 の席と下駄の置き場所と便所と鐘がなれば席に着
 く事を覺えさせます次には強い子は泣かないもの
 泣けば弱い事がわかるといふ事をよく話して
 きかせますそれで最初に教へます歌も「泣くな子
 よ強いよい子は泣きませぬ泣けば弱いがよくわか
 る」といふので御座います

○遊ばせ方
 家の近所の子供を紹介して共に手を引かす事
 己になれたる子供の性質を見計ひ友達にさする
 事

幼兒の獨りにて出來得る手技(大なる圓を帖る
 事連鎖等)をなさしむる事

共同遊嬉はひらいたを第一として手を引いて歩行
 するに馴れさせ兩三日を経てはかじめの如き簡單

にして變化多きものより始め凡そ十分間位づゝこれを見させます。これは始ての子供には珍らしく又自然に早く模倣する事になります。お話は幼児の一番好むもので御座いますから繪本を見せたり掛圖切抜書などをいろ／＼にして用ゐ話したり話させたりにしておもしろく遊ばせませす。一ヶ月位で殆んど全部よく馴れます。

○附添人 二三日間は附添を許して居ますが中には初めから一人で居るものも御座いますしおそくも一週間位致しますと全部おくり迎に致させて居ます。

○お辨當 は幼児の尤も楽しみに致して居ます。事で御座いまして特に新入幼児にとりましては家庭に居ます時の様に食事の間に何も頂きませぬのとお辨當といふ事が初めてなもので御座います。珍らしいといふ所から皆々何よりの楽しみに致して居ます。事ですから平日よりは二三分は早く初

める様に致して居ます。序ながらお辨當の事で思付ましたから一寸申上ります。

先々號で御座いましたか「體育と衛生」の中にも御座いました通り幼児に冷たい御飯を頂かせます事は衛生上よくない事と至極御同感で御座います。こちらでも暖爐の上に圓筒など造り種々の方法を試みましたがどうも下の方があまり熱くなりすぎたり上の方が冷たかつたり致しまして思ふ様に参りません所からいろ／＼工夫を致しまして昨年の春高さ二尺三寸巾二尺深さ一尺二寸の木箱(内都はトタン張)を造らせました。其中は二段の金網をはり之に幼児のお辨當を袋に入れたまゝで置けます。下には火鉢を入れておきます。そして其ふたには火の消えませぬ様に上下に穴をあけておきます。此様なもので試して見ました所が誠に好結果で御座いました。だから只今では右の様な箱を二個用ゐて居ますがパンを除きまして幼児全體のお辨當を暖めるには充分間に合つて居ます。其上火鉢に入れ

ます火も僅かで全體によく暖まれます此箱の代價は一個四圓八十錢位で出来上ります然し此他になほよい方法を御實行になつて入らつしやる御方々には御をしみなく御しらせを願度と存じます

○陳列室 陳列室には模形刺製の鳥獸等の外玩具やら繪本やら普通家庭に於て弄ぶもの糸とりきしやご、おてだま、まり、等を取り出し得る様になしおき毎日保母一名交替に之を監督して自由に使用させて遊ばせます存外とり亂しもせず喜んで遊びます當園出身者にて大學に學べるもの海軍に職を奉ずるものなど参りまして彼の繪のゆきたるまはまだ忘れません今もありませんかなど、申ました事が御座います

○毎朝の會集 會集の時間は夏は八時半冬は十時頃に致します此時の指導者は園長自身にさるゝ事になつて居ます唱歌や行進なども勿論御座いますが多くお話をなされまますお伽噺中にも西洋のお伽噺は殆んどない位でありまして多くは日本の歴史

中のおもしろい事を極やさしく話されるので御座います數回くりかへし話されますが喜んできゝます又は保母が各自の室に於て話しました簡單なるおもしろき話を受持の幼兒に役割して話させたり自分させたり致します例へば人が人を助けたる事なればほうたいなどするまねを子供がするので御座います他の組のものはおもしろがつて見て居ます事も時々御座います園長は會集に於て幼兒によい種をまかねばならぬと申て居られます此間の時間は大凡二十分位から四十分にもなる事が御座います

○庭園 當園は敷地四百六十八坪其内建坪百八十五坪空地二百八十三坪で御座います狭い場所に山があり池があり崖がありますから實に都會の幼稚園は庭がせまくて困ります如何にして有益に利用し得るかといふ事には常に苦心いたして居ます幸に諏訪山に近く半日の清遊には適しますが野外は年々人家建連つて子供の爲には不幸で御座い

ますこの園の二うねいむぎ池の中の二十株計りの
 稻は鶏の餌には足りませんがあらゆる空地に年中
 まかれたる菜種大根は兎、鶏、雁等の食料には十
 分で御座います幼児は毎日大きくなれる分より抜
 きて與へ居ますあもう少し廣々とした庭のほ
 しいこと、つくづく感じます

(四)

○幼稚園日記

(新入児の初め一週間)

双葉女學校 後藤りん

四月一日、月曜日、曇

今日は學期の初まりで幼稚園も新入が却々多い、
 幼児は今日初めて家庭を離れ、社會の交際場裡に
 立ちまじる、初舞臺若くは初陣とも云ふべきであ
 りますから、一日不安の面持ちで附添人にひたと
 寄り付き居るもの、怖いもの見たさに袖の下から
 窺き居るもの、保姆に年や名前を聞かれて羞かし
 さうに顔をそむけるもの、逃げ出すもの、甚しき

泣きだすもの、初めから一つ場所に凭りかゝり
 少しも動かぬものやら、適には入馴れて附添に下
 を曳かれながら此處彼處と見物して歩くもの、
 又は親しき友に遭つて、さも、懐かしさうに亦茶
 かしさうにして居るものやら、恍惚として人の撥
 ね廻る有様を熟視し居るもの、籠の鳥でも放した
 やうに無暗矢鶴に飛び廻るもの、家を出る時は大
 威張で出たのだが一人残されて、何んとなく淋し
 くて、大聲揚げて叫き喚くもの、今の今まで親にせ
 がんで入園をしたのだが、扱て幼稚園に来て見る
 と急に氣まり悪くて拗ね出すものと、それはく
 色々で各家庭の躰け方に依て小供の仕草が皆違つ
 てゐる、それと同時に家庭の狀態が略ぼ推察が出
 来て却々面白いものであります、今日は皆一つ所
 に集つて極く小供らしい、極く簡單なお話をして
 あしたは今日よりもよく面白いことをして遊ぶ約
 束で唱歌を唱つて歸へつた、唱歌も君が代をやつ
 と、唱つた、五色の聲と云ふけれども、什麼して

今日は十色位の聲が出た

四月二日、火曜日、晴

昨日保母から少し安心の出来るやうな話を聞かせられたので、小供も大分落ちつき人馴れても来た、それでソロソロと小活動を初める、什麼しても家庭が自由放任主義だと、小供も早く手が離れて直に友をつくるやうになるが、扱てこれと反対な家庭で、多くの婢僕にかしづかれたり、あまり愛に溺れ過ぎたり、虚榮の強い母親に育てられて小供は、兎角強情で我儘で偏屈で其上に依頼心が甚だしいのだから、人に容れられるのも遅く、又人に懐くのも却々遅い、扱て前日の約束もありますから、保母も今日は大車輪で成る可く家庭の遊戯に懸隔のない飯々事や、人形いちり、砂遊び、自由積木、摺紙などで遊ぶだが、什麼も未だ氣ま悪い方が七分と云ふ具合ですから、どちらかとも云ふと、あまり烈しい活動よりも活動の少ない、積木とか、摺紙などが大講で、倦ます厭かずと云

ふ所で自由に遊ぶで歸へつた、あしたの神武天皇祭は如何なる旗であるかを、極くく簡單に話して歸へした

四月三日、水曜日、神武天皇祭

四月四日、木曜日、快晴

小供でも却々用心深いもので今迄家庭で他人まぜずに遊んだ兒は人懐きが尤も遅い、如何に手を替へ、品を替へ、誘導しても些の活動もせずに隅の方で人々のすることをして、じつと観察してゐる、そして何に事も自分の胸に得心することが出来る様になると、初めて玩具を弄つたり、人と話もして見たり、そろく附添の側をはなれて一人遊びをする様になる、それが早くて一日二日遅くて一ト月位かゝるものもある、最もこれは小供の自然になつくのにかかせた時期であります、然かし大抵時期を見計ひ保母の用心で強行手段をやる(これ何程其幼兒が泣いても、かまわずに附添を離してしまふのである、そしてこれを斷行する保母に意志の強い一寸頼みのあるもの、宜し)これは一寸酷なやうであります、左程酷でな

いのであります、なせなれば幼児は最早自分だけの
 交際場裡は思ふたよりも不安でないことは分つて居るのであるが唯今迄での習慣上何んとなく心淋しく思われるので我儘をやつて居るので、丁度小供が母親の乳を何時迄も弄り付けると一寸でも觸て見なければ寐られぬのと同じ道理で、一度意氣地なしと強く叱られると自分ながら辱しく亦馬鹿らしく感じて、それぎり止めると同じこととあります、それは不思議な位直ります、什麼も日本の家庭は母親の意志が誠に弱く愛に溺れやすいので、人として大切なるとして幼児のうちから躡けなければならぬ服従、規律、忍耐、獨立などは少しも養成されてゐないので困ります、今日は新入生も大々人馴れて来て、過半はこそり〜と隅の方で小活動をしてゐる、誠に心持ちの好い天氣でありましたから庭に出て金魚に餌をやつたり、色々な草花を採つて来てベンチで人形と飯々ごとをしたりして遊んだ、そしてお辨當を喰べてから

は隠れん坊が盛に初まつた、が大々嫌きた様子で今度は書合せ骨牌が初まつた、大に皆んなの氣になつて又あしたもネと約束をして歸へつた

(當幼稚園は如何なる玩具でも大抵なものも成るべく備へて置くやうにしておりますが、但し實用的のものが多く裝飾的のものは第二に措くそして戸棚でも引出しでも箆でも皆小供が自由に持ち出すことの出来るやうになつてゐる)

四月五日、金曜日、快晴

大分今日は新入生も愉快さうに、活動して来た八時半と云ふに最早皆登園して来てゐる、ある團體は積木を盛に積み上げて如何にも面白さう、或る團體は繪本をひろげて熱心に視入つてゐる、又或る團體は獨樂廻して夢中である、或る團體は電車ごっこで走り廻つてゐる、ある團體は叔母様ごっこでも楽しさう、又運動場のある團體は今や鞞鞞の真最中、こちらの團體は砂池に這入つて盛に隧道、堤防を築きて得意満面に笑をたへて遊

ひで居る、こちらの園籠は草花を摘み、蝶を追
 ぶて嗜々として飛び廻り、或は輪とび、輪つき、
 鞠投げ、とそれは、面白さう、天気も昨日にま
 しての好天氣で監督者の吾々も共に天國に遊んだ
 やうな氣がした、今日の午後は皆んな一ツ所に車
 坐になつてお話をした、それはある幼児の望むだ
 金太郎ちゃんのお話であつた、新入生にしては却
 々眞面目に聴いてゐた終りに深呼吸法により大伸
 びをさせ、金太郎さんの唱歌を唱つて威勢よく解
 散した

四月六日、土曜日、曇天少風

今日の新入生の状態は昨日とあまり違はぬ様であ
 つた、凡て人は大人でも少人でも一時の變化を喜
 ぶものであるけれども五六日たつと又もとの境遇
 を思ひ出して、何んとなく淋しく、うら悲しく感
 じるものであります、小供も矢張其如くで昨日ま
 では大に活動して愉快に遊んで居つた兒が、今日
 は急に幼稚園が嫌やになつて今迄一度も泣かなか

つた兒が大聲出して泣きたてると云ふ様なことが
 間々あります、之れは俗に云ふお里戀ひしと云ふ
 ので必ず二三人はあるのであります、扱て此お里
 戀しやの原因は何んであるかと云ふに、先づ第一
 は勝手な時に口腹を充たすことの出来ぬのが一大
 原因で大人でも同じこと、初めて家を出て奉公や
 兵隊に往て一番悲しく思ふのが此喰べ物である、
 それから、第二が規律、これも家庭は幾何程規律
 があつても、亦幼稚園が如何程家庭的であつても
 多人數と少人數では規律のとり方が幾等か違ふ所
 がある、第三は服従、これも家庭では如何程厳し
 くなさる様でも幾等か我儘を通させるところがあ
 るが、幼稚園ではそれが出来ない、第四は依頼こ
 れも家庭では自分相當に出来得ることも婢僕のも
 あるところでは主人からして遣らせぬことがある
 のでありますから、上流の家庭程小供に依頼心が
 多い、幼稚園ではそれが出来ぬ、扱て此點は大人
 も小供も同じことなので、まして親の膝元を離れ

たばかりの乳呑兒のやうなのでありますから實に當然なことであります、故に保母たるものは此小供の心を斟酌してあまり無茶苦茶な小言などは言はぬやうに除々に懐け、正直や服従とか規律、忍耐、獨立と最早此時分から別に教ゆると云ふのはありません、知らず識らずの裡に良い習慣のつくやうにしなければなりません、今日も外遊がお重で席を程よき所に敷き瓦かけを摺つてお砂糖や薬や、お壽司やなどこちらの方では砂場で滑稽なる相撲とりが初まつてゐた、部屋に這入つてから摺紙で極く／＼簡單なる金太郎さんを拵へて大悦びて歸へつた。

外へ外へ(五)

手に餘るげん／＼のたば捨てにけり (子規)
摘草やよき衣きたる女の童 (同)
幼子や青きを踏みし足の裏 (同)

保育の實際

○文字を書く幼児

京都市嘉樂小學校 藤田東洋

一、幼兒の文字を知り來つた所以
幼兒の文字を知り之れを書くと言ふのは人の真似をなしたのに過ぎぬ。即家庭に於て兄弟のなせる事を見聞して模倣性に強き彼等は好奇心にかられ之れを曲みなりにでも自慢らしく之れを書かんとするのである、其書いたものを周圍の者共に見せ其褒め言葉を得て得意然として益之れを書かんとするのである。
要するに子供の境遇及外來の刺激に依て覺官的に知覺したるものである。併し大多數の者が文字を書くや否と言ふにそれは少數に過ぎない。余のテラホラ聞く所に依ると或幼稚園は保育終了後直に尋常小學一年へ入學することであるから子供が